

円覚寺仏日庵所蔵『展鉢式』について

館 隆 志

はじめに

本論で紹介する円覚寺仏日庵所蔵『展鉢式』は、禪林の食事作法を伝える史料の一つである。禪の食事作法は、鎌倉時代に入宋し、南宋禪林を直接に見聞した僧侶たちによって日本にもたらされた。禪寺では、毎日の食事も修行の一つであるが、その修行生活は、禪宗独自の軌範を記した清規に基づいている。一方、清規に記された記事だけでは情報が足りず、その記述のみからでは修行生活を再現することはできない。清規とそれに基づく実際の修行生活があつてこそ、次代に繋ぐことができるだろう。

禪の食事作法を記した現存する最も古い清規は、『禪苑清規』（一一〇三年成立、以下『禪規』）であり、次いで、『無量寿禪師日用清規』（一一〇九年成立、以下『日規』）がある。『禪規』は栄西（一一四一～一二一五）によって一部導入されているが、栄西開山の寺院で実際にどのような食事作法が行なわれていたかについてはよくわからない。

一方、禪の食事作法の導入というのであれば、道元（一一〇〇～一二五三）は日本における嚆矢とも言うべき存在であろう。『禪規』や『日規』を用いつつも、『赴粥飯法』を撰述しており、『赴粥飯法』は中世日本の禪林で行なわれた食事作法を知る上で最も重要かつ、唯一の史料だからである。日本の臨済宗には道元の『赴粥飯法』に準ずるような史料はない。清規の抄の中に記された断片的な情報以外、臨済宗の食事作法を記した中世の書物は一つも残つ

ていないのである。

しかしながら、食事作法を記した書物が必要なかつたということも言えるだろう。それは、実際の禅寺では食事作法は、そのまま教わり、あるいは見て学ぶものであり、しかも毎日行なうので、しばらくすれば覚え、実践し続けるので忘れないからだ。曹洞宗で受け継がれている複雑な食事作法も、二週間もあれば間違えることなく行なうことができるようになる。おそらく、現在の修行道場で食事作法を学ぶ際に、テキストを読んで食事作法を学習して覚えた禅僧は一人もいない。

また、『禅規』『日規』に食事作法が記されており、後に『勅修百丈清規』（一二三三年成立、以下『勅規』）にも食事作法が記されているから、それらを用いれば良かったとも考えられる。つまり、新規に食事作法を作成する必要がなく、大本のテキストがあり、その上でそれぞれの修行道場の事情に合わせて、食事が行なわれていたのだろう。この点については推測ではあるが、独自の食事作法を記した書物がないということは、書く必要がなかったことを想定すべきである。

一方、江戸時代になると、臨済宗でも食事作法を記した書物が登場するようになる。この理由は、中世と江戸期で食事作法が変わったことがあるのかもしれない。禅林での食事は、中世は僧堂で食することを基本としていたのに対し、戦乱の時代を経た江戸時代には、僧堂という建物は、ほとんどの禅寺に備わっていないかった。そのため、①僧堂での食事作法を後世に伝えるため、②僧堂以外で食事をする際の食事作法を定めておくため、という二つの理由から、食事作法が記されたと考えられるのである。

また、臨済宗黄檗派（黄蘗宗）の隠元隆琦の来朝という外的な要因もあったことであろう。臨済宗黄檗派では、坐禅をする建物を禅堂と、食事の建物は齋堂と呼称し、坐禅と食事をする建物を分けていた。この方式は、後に日本の臨済宗にも取り入れられていくこととなった。

このような、江戸前期における臨濟宗の食事作法を記した史料として、現在、三点を確認している。円覚寺仏日庵所蔵『展鉢法』（一六六八年成立）、無著道忠撰『小叢林略清規』（一六八四年刊）、駒澤大学図書館蔵『清規抄』（一六八九年成立）である。

本論では、最も成立が古い円覚寺仏日庵所蔵『展鉢法』を翻刻紹介し、その内容について考察するものである。

円覚寺仏日庵所蔵『展鉢式』の書誌情報

円覚寺仏日庵所蔵『展鉢式』について報告したい。まず、本史料は、『鎌倉市文化財総合目録』『古文書・典籍・民族篇』の「仏日庵」の項目に、「96、展鉢式、寛文八年二月、一冊、27・5×19・5」と記されている史料に当たる。本史料の所蔵先である円覚寺仏日庵は、鎌倉山ノ内にあり、大本山円覚寺の山内塔頭の一つである。北条時宗（一二五一～一二八四）の廟所であるが、後に荒廢し鶴隱周音（生没年不詳）が十六世紀後半に中興して塔頭寺院とした。

本史料は、現在、鎌倉国宝館にて寄託所蔵されている。表紙の外題は欠けていて「式」の部分だけが読み取れるが、一丁表に「展鉢式」とあるので『展鉢式』が外題と考えられ、内題は「展鉢之法」である。書物の状態はあまり良くなく、虫損はそれほど目立ったものではないものの、全般的にかなり傷んでいる。特に左下の部分の傷みが著しく、文字が読めない部分がいくつか確認できる。

本書については、奥書に、

此者五嶽流習之式也。今因百丈之古規詳考、始末間正舛訛。凡文似倭字、僞用丹毫。要使童行者易知之。願夫為日用規約之一助乎云。寛文戊申二月日、朴堂鴻西堂誌。

とあること以外にはわかることはない。

まず、奥書によれば、本書は寛文八年二月に朴堂鴻西堂によって記されたものであることがわかる。しかし、この朴堂鴻西堂は、円覚寺や仏日庵の世代ではなく、如何なる人物であったかはよくわからない。そもそも、本書を記した朴堂鴻西堂が、どの寺院の關係者なのかさえよくわからないため、本史料の伝来も不明である。

ひとまず、『展鉢式』は五山流の食事作法を記したものであり、朴堂鴻西堂が「百丈之古規詳考」し、それに関んで『展鉢法』を記したということになるだろう。ただし、朴堂鴻西堂による「百丈之古規詳考」に当たる史料は、仏日庵の蔵書にはない。

駒澤大学図書館蔵『清規抄』は、臨済宗大覚派の最岳元良（一五八三～一六五七）の弟子によって作成されたと考えられる江戸前期の『日用清規』の抄であり、この史料にも展鉢の作法（以下「展鉢作法」と仮称する）が記されている。この「展鉢作法」に、

当世叢林弊裏、往々壞僧堂故、今多方於客殿、庫裏齋僧、依之、就禪苑清規与日用清規粗記焉。

とあるように、江戸前期の禪宗寺院では、多くの場合で僧堂はすでに壞れて再建されていなかった。この点については、面山瑞方（一六八三～一七六九）『僧堂清規考訂別録』（一七五二年刊）の「題辭」に、

京鎌倉之五岳及我洞上無有差異。但以世下法衰而緩打坐也。伽藍中僧堂先廢。五岳今唯遺洛東慧日之一字耳。如

洞上則列国甲刹皆在。（曹全四・二〇一頁）

とある記事も参考になる。僧堂が壞れ再建されなかったため、客殿や庫裏などで食事が行なわれていたのである。

このうち、『展鉢式』は僧堂で食事をすることを前提に記されているが、『清規抄』所収「展鉢作法」と『小叢林略清規』（一六八四年刊）は、僧堂に代わる建物（客殿や庫裏）での食事作法を記しているとみられる。

たとえば、『小叢林略清規』「展鉢通弁」には「齊供元行于僧堂。古規備焉。今随处行之。設案代单板。其規亦不可無少異」（大正蔵八一・七〇四c）とあり、随处にて行なわれそこには「案」が用いられたことを記す。また、『清規抄』

所収「展鉢作法」には「サテ入堂法、鉢ヲ両手ニ捧テ入り、聖僧ノ前ニ問訊シテ、サテ五位ニ行テ、鉢ヲ台ノ左辺ニヲキ、隣位ニ問訊シ、衣袖袈裟ノ裳ヲカキロサメ、右辺ヨリ、左脚ヲサキニシテ、台ヲノリコヘ、順ニ転メ坐ス」とあり、「台」が用いられている様子が記されている。坐禪の単の淨縁の代わりとなる「案」や「台」が記されているが、『展鉢式』にはこの記述がない。

そのため、『展鉢式』は僧堂での食事作法を後世に伝えるため、『清規抄』と『小叢林略清規』所収の展鉢作法は、僧堂以外で食事をする際の食事作法を定めておくために執筆されていたのではないかと考えられる。一方で、『清規抄』所収「展鉢作法」には、「聖僧」や「入堂」の記述が見られるため、僧堂に代わる建物（客殿や庫裏）を「堂」と称し、「聖僧」を置いていたのかもしれない。

『展鉢式』における典籍の引用として、『勅規』が用いられていて、「食スル時ノイマシメハ日用清規ニ詳ナリ」という記述から『日規』も用いられていることがわかり、『禪規』や『禪林備用清規』（一三二一年成立、以下『禪備』）の作法も確認できる。また、内容とすれば、『勅規』『日規』の展鉢作法よりもかなりコンパクトにまとめられている印象をうける。そのため、実際に行なわれていた作法に基づくものだったのではないかと推定することができる。

すなわち、僧堂がなくなつたのちにも、いずれ再建されたときのために、僧堂での食事作法はある程度継承されていたのではないかと推定することである。コンパクトにまとまっているのは、長い年月をかけてその状態になつたのか、あるいは、客殿、庫裏で食事を行なうようになったためなのかは不明である。しかしながら、おそらくはそのどちらが実際の理由になるであろう。

鎌倉時代に日本へ伝えられた『禪規』と『日規』であるが、このうち、流布本系統の『日規』（宋版）は、『五味禪』という日本成立の書物に『入衆日用』として収録され、その後幾度も刊行されることとなつた。さらに、『日規』は江戸時代に単体の書籍としても刊行された。一方、広本系『日規』（元版）も日本に導入され、五山版も刊行されたが、

こちらは日本の禅林でほとんど用いられなかった。南北朝期から室町時代にかけて『勅規』が日本にもたらされ、これが主流となったからである〔椎名二〇〇三・二〇一六〕。鎌倉時代までは『禅規』と『日規』、『勅規』が日本に入ってきたから、『勅規』も用いられていったのである。

『展鉢式』には、『禅規』『日規』『勅規』や、『禅備』などさまざまな清規のやり方が混在し、しかも中世日本の『諸回向清規式』（一五六六年成立、以下『諸規』）に見られる作法や、独自のやり方もみられる。

すなわち、禅僧たちが南宋禅林から直接もたらした食事作法は、『禅規』『日規』『勅規』などさまざまな清規に記された食事作法とともに、それぞれの僧堂に合わせ、徐々に形を変えながらも、江戸時代まで受け継がれていたと考えられるのである。本史料には、禅宗の食事作法の変遷を知る上で極めて重要な位置づけを与えることができるであろう。

円覚寺仏日庵所蔵『展鉢法』、無著道忠撰『小叢林略清規』、駒澤大学図書館蔵『清規抄』や、『禅規』『日規』『勅規』との比較は今後の課題としたい。

〔補記〕本論執筆に際し、史料閲覧、翻刻に際しまして、円覚寺仏日庵様のご許可を給りました。また、本論は、JSPS 科研費 (P17H00904・20K00060) の助成を受けたものである。記して感謝申し上げます。

〔参考史料〕

駒澤大学図書館蔵『清規抄』一六八九年成立

玉村竹二、井上禅定『円覚寺史』春秋社、一九六四年

〔訳注 禅苑清規』、鏡島元隆、佐藤達玄、小坂機融著、曹洞宗宗務庁、一九七二年

『鎌倉市文化財総合目録』『古文書・典籍・民族篇』鎌倉市教育委員会編、一九八五年

『道元禪師全集』六卷、小坂機融、鈴木格禪校註、春秋社、一九八九年

『小叢林略清規』、禪文化研究所編集部訓註・編集、禪文化研究所、一九九五

椎名宏雄「五山版『無量寿禪師日用清規』』『宗学研究』四五、二〇〇三年

椎名宏雄編『五山版中国禅籍叢刊』五卷、綱要・清規、臨川書店、二〇一六年

【凡例】

一、円覚寺仏日庵所蔵(鎌倉国宝館管理)『展鉢式』を用いて翻刻を行なった。

一、略体字、異体字は基本的に常用漢字に改めた。

一、偈文など朱字を用いている部分があり、翻刻の下部にて、「朱字初」「朱字終」の補足を行なった。

一、判読できない文字は□、二字以上の可能性がある場合は「」と表記する。もとななる『日規』『勅規』などによって補える場合、意味内容から推定できる場合は、□と「」の右側に()で補った。ただし、多くを推定に頼らざるを得なかったため、この部分は参考に止めてもらいたい。

一、割註については()で記した。また、割註の改行は「」と表記した。

一、訳注に際しては、便宜上、段落ごとに分けて訳した。偈頌については、多くの場合そのまま音読していたと思われるので、作法を理解しやすくするためそのまま掲載した。まず、訓点を附したものを載せ、次いで語義、次いで現代語訳を載せた。

一、食事作法や偈頌の出典については、判別できない文字がある場合や、解釈上必要な場合のみ掲載した。

一、一丁表に「清浄法身毘盧遮那仏」とあるのは、おそらく、四丁表の書き損じを利用したためである。たとえば、

七丁の裏面に「展鉢之法」「長板三下ノ時下鉢」と書かれており、二丁の書き損じが用いられている。以上のことから、訳注では「清浄法身毘盧遮那仏」は書き損じと判断して省略している。

一、『展鉢式』所収の食事作法は、現在の臨済宗の食事作法よりも曹洞宗の食事作法のほうに近い。現在の臨済宗の食事作法に基づいた場合、解説することが困難なほどである。そのため、訳注に際しては、筆者の永平寺での修行経験を踏まえたものが反映されている。以上のことを踏まえた上で、訳文に関してはあくまで参考程度に止めて頂きたい。また、臨済宗の食事作法については、花園大学准教授の小川太龍先生にご教授を頂いた。

【翻刻】

〔（展鉢）〕
式

清淨法身毘盧遮那仏

（表紙）

展鉢式

(1才)

(1ウ)

展鉢之法

〔藏書印・仏日藏書〕〔藏書印・不明〕

長板三下ノ時下鉢合掌シテ正ク立テ偈ヲ念ス是

ヲ下鉢偈ト云

執持応器

当願衆生

※〔執〕朱字初

成就此器

受人天供

※〔供〕朱字終

一手ハ鉢ヲ托シ一手ハ鉤ヲ解両手ニ捧テ入堂聖

僧ノ前ニ問訊吾位ニ行テ隣位ニ問訊〔百丈〕〔清規〕ニ上中下モ

問訊上中下モ〕問訊シ合ストアリ〕サテ右辺ヨリ左脚ヲ先シテ順ニ転右

大衆入堂了テ木魚長撃ニ通是ヨリ堂〔前廣唱〕

維那槌一下大衆合掌シテ聞槌偈ヲ〔唱〕 (2才)

仏生迦毘羅 成道摩揭〔陀〕

※〔仏〕朱字初

説法波羅奈 入滅拘絺羅

※〔羅〕朱字終

鉢ヲ展ニハ先合掌シテ展鉢偈ヲ念ス

如来応量器 我今得敷展

※〔如〕朱字初

願共諸衆生 等三輪空寂

※「寂」朱字終

複帕ヲトキ膝巾ヲ展テ膝ヲオホヒサテ複帕ヲ疊テ

三角ニ転シ単ノ外へ出(スカ)又様ニシ鉢ヲ左へ寄テ鉢單

ヲシキ鉢ヲ單ノ上左ノ方ニヲキ鉢拭ト匙筋ノ袋ト

ヲ膝巾ノ上ニ横ニヲキ鉢蓋ヲ鉢ノ右帕子ノ上ニヲキ

サテ両手ノ指頭ニテ鎖子ヲ取出シ小ヨリ次第二並へ

(2ウ)

へ相打(マ)テナラヌ様ニシテ置也捻メ第四第五ノ指ハ触

指トテ用ヒザル也サテ筋ヲ出テ鉢ト頭鎖トノ間ニヲキ

刷ヲ出シ菜鎖ト水鎖トノ間ニヲキ單ノ外半寸許

出ス可シ飯ヲヒクトキ問訊シテ鉢ヲ両手ニテ捧テ向

ノ方ヲササゲテ受可シ其間ニ受食ノ偈ヲ念ス可シ

若受食時 当願衆生

禅悦為食 法喜充滿

※「若」朱字初
※「滿」朱字終

サテ匙ヲ出シ鉢ノ中ニ置可シサテ蓋ヲカク可シ「」

食汁菜トモニヤト思ス時ハ右ノ手ヲ拳(ク)「」

但シ飯汁ハ自ラ両手ニテ捧テウク菜ナ(ク)「」

(3オ)

儘ナリサテ大衆へ飯ヲ一偏ヒキテ維那遍食(種)「」

シ合掌ノ心経ヲ始ム大衆同誦ス経畢テ維那〔種シ〕

上来諷経功德奉為耕夫餉婦疲馬嬾牛

※「上」朱字初

蟻蚊虻蝦蟆蚯蚓春炊人力供給淨人存者福

寿康寧亡者往生淨土十方三世一切諸仏（、、、、、、、、、、）密

※「密」朱字終

サテ維那

稽首薄伽梵 円満修多羅

※「稽」朱字初

大乘菩薩僧 功德難思議

※「議」朱字終

偈ヲ唱テ直ニ仰憑大衆念ヲトナ八十仏名ヲ唱

(3ウ)

清淨法身毘盧遮那仏

※(4オ)「ルビ」●「朱字

円満報身盧遮那仏

千百亿化身釈迦牟尼仏

当来下生弥勒尊仏

十方三世一切諸仏

大聖文殊師利菩薩

大行普賢菩薩

大悲觀世音菩薩

諸尊菩薩摩訶薩

モコホシヤホロミ
摩訶般若波羅密

(4才)

一仏三匝シテ槌ヲ打大衆合掌シテ口ノ内ニテ「〔十仏名〕」

唱畢テサテ給仕汁ヲヒキ一徧ヒイテ維那「〔維ヲ〕」

下シテ合掌シテ施食傷ヲ唱へ大衆モ合掌ソ口ノ内ニテソロクト唱フ

三徳六味 施仏及僧

※「三」朱字初

法界有情 普同供養

※「養」朱字終

如レ此唱テ維那槌一下ス大衆左右ヲ看テ一度ニ相

揖テ五觀想ヲナス

一計功多少量彼來処 二付已德行全缺多減イ度供

※「二」朱字初。注記も朱字。

三防心離過貪等為宗 四正イ事似良藥為療形枯イ取濟形苦

五為成道業応受此食イ世報非意〔名義集引大論詳取以生厭〕想往可見繁多故略〕※「食」朱字終

名義集十

※「名」4ウ上段脚注初

九〔二〕十〕曰事鈔

食不過三匙

初匙斷一切惡

中匙修一切善

後匙度一切

衆生増一云

多食致苦患

少食氣力衰

処中而食若

如秤無高下

※「下」4ウ上段脚注終

(4ウ)

次ニ生飯ヲ取テ刷ニラク生飯ヲ取ハ七粒ニスグヘカラス

少レハ慳食トス合掌ノ出生ノ偈ヲ念ス

汝等鬼神衆 我今施汝供

此食遍十方 一切鬼神共

※「汝」朱字初
※「共」朱字終

サテ三口クフテ汁ヲスフ食スル時ノイマシメハ日用清規

ニ詳ナリサテ食シ畢ントスル時上座ヲヨク見合テ鉢

ニ残タル食ヲ頭鎖ヘ移シテサテ筋ニテ食スル也捻ノ

飯ハ匙ニテ食シ菜汁等ハ筋ニテ食スレ疋頭鎖

テハ筋ニテ飯ヲ食スル也サテ食畢テ大衆筋ヲ〔飯ヲ〕

見テ給仕湯ヲヒク問訊ノ鉢ニウケ汁鎖ヘ〔移シ〕

(5オ)

吞也サテ菜桶ヲヒク残ナケレハ右手ヲ挙クア〔イダ〕

ニテ移ササテ生飯攪ニテ生飯ヲトル大衆問訊〔^副〕
 ヲ押テトラスル也サテ水ヲヒク問訊ノ鉢ニウク分□
 鎖ニ余ヌ様ニ心得ヘシ刷ニテ鉢ヲ洗ヒ刷ト水トヲ頭
 鎖ニウツシ鉢ヲフキ鉢拭ヲ鉢ノ内ニヲキサテ刷ニテ
 匙ヲ洗ヒフイテ袋ニ入サテ刷ニテ頭鎖ヲ洗ヒ刷ト水
 トヲ菜鎖ニ移シ頭鎖ヲフイテ鉢ニ架シサテ刷ニテ箸
 ヲ洗ヒフイテ袋ニ入刷ニテ菜鎖ヲ洗刷ト水トヲ水
 鎖ニ移シ菜鎖ヲフイテ架シ刷ヲフイテ袋ニ入サテ
 折水ヲヒク問訊ノ偈ヲ念メコボス也

(5ウ)

我此洗鉢水 如天甘露味 施汝諸鬼神

※〔我〕朱字初

悉令得飽滿 唵摩休羅細婆訶

※〔訶〕朱字終

サテ水鎖ヲフイテ架ス淨巾ニテ汁水ナトノコホレタ

ルヲフキサテ単ヲ疊テ鉢ニ入膝巾ヲ収鉢ノ蓋ヲ

収匙筋ノ袋ヲ収サテ帕子ヲムスビ其上ニ鉢拭ヲ

二ツニ折テカケサテ問訊ノ食畢ノ偈ヲ念ス

飯食訖已色力充 威震十方三世雄

※〔飯〕朱字初

回因転果不在念 一切衆生獲神通

※〔通〕朱字終

下堂ノ槌一下シテ起左右へ問訊ノサテ鉢ヲ〔^{持テ}〕

出若襯金アレハ五觀想了テヒク也合掌「^シ」

(6才)

ノ儘ヲク也維那槌一下シテ施財偈ヲ唱□

財法二施 功德無量

※「財」朱字初

檀波羅蜜 具足円満

※「満」朱字終

若菓子アレハ食畢ノ偈ヲトナヘヌ前ニヒク也

此者五嶽流習之式也今因百丈之古規詳

考始末間正舛訛凡文以倭字偈用丹

毫要使童行者易知之願夫為日用規

約之一助乎云

寛文戊申二月日朴堂鴻西堂誌

(6ウ)

(7才)

(7ウ)

(裏表紙)

【訳註】

『展鉢式』

展鉢之法 [藏書印] [藏書印]

①長板三下ノ時下鉢、合掌シテ、正ク立テ偈ヲ念ス。是ヲ下鉢偈ト云。

執持応器、当願衆生、成就此器、受人天供。

一手ハ鉢ヲ托シ、一手ハ鉤ヲ解、両手ニ捧テ入堂、聖僧ノ前ニ問訊、五位ニ行テ、隣位ニ問訊〔百丈〕〔清規〕ニ上中下モ問訊、上中下モ問訊シ合ストアリ。サテ右辺ヨリ左脚ヲ先シテ順ニ転右。大衆入堂、了テ木魚長擊ニ通。是ヨリ堂〔前鐘鳴〕。維那槌一下、大衆合掌シテ、聞槌偈ヲ〔唱之〕。

仏生迦毘羅、成道摩揭〔鹿〕、説法波羅奈、入滅拘絺羅。

鉢ヲ展ニハ、先合掌シテ展鉢偈ヲ念ス。

如来応量器、我今得敷展、願共諸衆生、等三輪空寂。

〔語義〕○長板三下…長板（長版）は、雲版という鳴らし物を長く打つこと。三下は文字通りであれば三回打つことを指す〔補1〕。○下鉢…僧堂で自分の単位の上方向にある鉢（応量器）を下ろすこと。○執持応器…受人天供…〔補2〕。○鉢…応量器のこと。○百丈「ニ上中下モ…」百丈清規ニ上中下モ」か。○百丈トアリ…〔補3〕。○是ヨリ堂「…」…「是ヨリ堂前鐘鳴」か〔補4〕。○聖僧…僧堂の中央に安置する仏像〔補5〕。○隣位問訊…僧堂で自分の左右の単の人を隣位と呼ぶ〔補6〕。○木魚…魚鼓。魚の形をした鳴らし物〔補7〕。○長擊ニ通…木魚をニ通（二会）打つこと〔補8〕。○維那…禪宗寺院の僧堂などで修行僧を監督指導し、堂内の衆務を総覧する役。六知事の一つ。○聞槌偈ヲ「…」…「聞槌偈ヲ唱フ」か。○聞槌偈…展鉢の際に唱える偈文の一つ。○展鉢…食事の際して、複帕（袱紗）につつんだ応量器をひろげること。○展鉢偈…展鉢の際に唱える偈文の一つ。○如来応量器…等三輪空寂…〔補9〕。

〔訳〕長板（雲版）三下を聞いて鉢を下ろす。合掌して、正しく立ち、偈を唱える。これを「下鉢偈」という。

執持応器、当願衆生、成就此器、受人天供。

一方の手で鉢をささえ、一方の手で〔鉢が結ばれた〕鉤を解き、〔鉢を〕両手に捧げて〔僧堂に〕入堂する。聖僧の前で問訊して、吾位（自位）に行つて、隣位に問訊〔「救修百丈清規」には、上中下座も問訊、上中下座にも問訊し合わすとある〕。次に〔単の〕右側の人より左脚を先に出していきながら順に右転。大衆の入堂了つて木魚長撃を二通する。是より堂前の鐘鳴る。維那は槌を一下し、大衆は合掌して、問槌偈を唱える。

仏生迦毘羅、成道摩揭陀、說法波羅奈、入滅拘絺羅。

鉢を展げる際には、先に合掌して、展鉢偈を唱える。

如来応量器、我今得敷展、願共諸衆生、等三輪空寂。

② 複帕ヲトキ、膝巾ヲ展テ、膝ヲオホヒ、サテ複帕ヲ畳テ、三角ニ転シ、単ノ外へ出又様ニシ、鉢ヲ左へ寄テ、鉢単ヲシキ、鉢ヲ単ノ上左ノ方ニヲキ、鉢拭ト匙筋ノ袋トヲ膝巾ノ上ニ横ニヲキ、鉢蓋ヲ鉢ノ右、帕子ノ上ニヲキ、サテ両手ノ指頭ニテ鎖子ヲ取出シ、小ヨリ次第二並へへ相打テナラヌ様ニシテ置也。捻ノ第四第五ノ指ハ触指トテ用ヒザル也。

〔語義〕○複帕（ふくはく）…応量器を包んでいる布。○膝巾（しつきん）…前掛けの布。折りたたんであり、応量器とともに、複帕で納められている。食事に際しては、複帕を解いて、次に前掛けで膝を覆う。○複帕ヲ畳テ、三角ニ転シ、単ノ外へ出又様ニシ…〔補10〕。○鉢単（はったん）…禅寺で食事に際して、器の下の敷物〔補11〕。○鉢拭（はっしき）…布巾のこと。○匙筋袋（しじょたい）…さじとはしを入れる袋。○匙筋（しじょ）…さじとはし。○鉢蓋（はつがい）…鉢に埃などが入らないようにする蓋〔補12〕。○鎖子（くんす）…応量器

の中に納められた器のこと。本『展鉢式』からは、頭鎖、菜鎖、水鎖と、鉢蓋が確認できる。○触指：触はけが
 れのこと。古代のインドにおいて、四指五指で不浄なることを扱ったことにより、四指五指を触指と称した。

〔訳〕復帕（応量器を包んでいる布）を解き、膝巾（前掛けの布）を展げて膝を覆い、次に復帕を折りたたんで三角
 の形を作り、単の外へ出すようにして、鉢を左に寄せて、鉢単（食事の際の敷物）をしいて、鉢（応量器）を〔鉢〕
 単の上左の方に置いて、鉢拭（布巾）と匙筋袋（さじ・はし袋）を膝巾（前掛けの布）の上に横に置いて、鉢蓋（鉢
 の蓋）を鉢の右側、復帕の上に置き、次に両手の指先で鎖子（応量器の中に納められた器）を取出し、小より次第に
 並べて互いが当たって音がならないようにして置く。総じて、第四第五の指は触指なので用いないように。

③サテ、筋ヲ出テ鉢ト頭鎖トノ間ニヲキ、刷ヲ出シ菜鎖ト水鎖トノ間ニヲキ、単ノ外半寸許出ス可シ。飯ヲヒクトキ、
 問訊シテ、鉢ヲ両手ニテ捧テ、向ノ方ヲササゲテ受可シ。其間ニ受食ノ偈ヲ念ス可シ。

若受食時、当願衆生、禪悅為食、法喜充滿。

〔語義〕○頭鎖：鎖子の一番大きいもの。応量器の次に大きいもの。この中に、鎖子が幾重にも納められる。○
 刷（せつ）：食器を洗うときの道具。○単ノ外半寸許出ス可シ：刷を半寸出したあたりに生飯（サバ）を置き、
 後に浄人が攪という道具を用いて、ここから生飯（サバ）を集める。○向ノ方ヲササゲテ：応量器を浄人（給仕
 人）の方に向かって少し下げると、浄人が粥や飯を給仕しやすくなるため、この動作をする。○若受食時→法喜
 充滿：「補13」。

〔訳〕次に、筋を出して鉢（応量器）と頭鎖（鎖子の一番大きいもの）との間に置いて、刷（食器を洗うための道具）
 を出して菜鎖（鎖子の二番目）と水鎖（鎖子の三番目）との間に置いて、単の外に半寸（一・五cm）許り出すように。
 飯を配る際に、問訊し、鉢を両手でささげ、「給仕の」向きの方を〔器を〕さげて受けるように。その間に受食の偈

を唱えなさい。

若受食時、当願衆生、禅悦為食、法喜充滿。

④サテ匙ヲ出シ、鉢ノ中ニ置可シ。サテ蓋ヲカク可シ「下」。食汁菜トモニヤト思ス時ハ、右ノ手ヲ拳ツ」。但シ飯汁ハ自ラ両手ニテ捧テウク。菜ナ「下」儘ナリ。サテ大衆へ飯ヲ一徧ヒキテ、維那遍食種」。シ、合掌ノ心経ヲ始ム。大衆同誦ス。経畢テ維那「種」合掌ノ回向ヲヨム。

上來諷経功德、奉為、耕夫餉婦疲馬、嬾牛螻蟻蚊虻、蝦蟆蚯蚓春炊、人力供給淨人、存者福寿康寧、亡者往生淨土。十方三世一切諸仏、へ、へ、へ、へ、へ、密。

サテ維那、

稽首薄伽梵、円満修多羅、大乘菩薩僧、功德難思議。

偈ヲ唱テ直ニ仰憑大衆念ヲトナヘ十仏名ヲ唱

清淨法身毘盧遮那仏

円満報身盧遮那仏

千百度化身釈迦牟尼仏

当来下生弥勒尊仏

十方三世一切諸仏

大聖文殊師利菩薩

大行普賢菩薩

大悲觀世音菩薩

シソフサカモコサ
諸尊菩薩摩訶薩
モコホシャホロミ
摩訶般若波羅密

〔語義〕○右ノ手ヲ挙「」：「右ノ手ヲ挙グ」か「補14」。○菜ナ「」儘ナリ：「菜ナドハ儘ナリ」か。飯汁とは異なり、菜は手に器を持たないことを指すか。○維那遍食「」シ：「維那遍食槌シ」か。ただし二文字分あるようにも見える。○遍食槌：『入衆日用』聞遍食槌。看上下肩。以面相朝。挹食不得正面以手揺兩辺（統藏一一・四七二d）とある。○経畢テ維那「」：「経畢テ維那槌シ」か。○上来諷経功德亡者往生淨土：「補15」。○稽首薄伽梵く功德難思議：「補16」。○仰憑大衆念：仰憑大衆念は大衆に唱えることを促す言葉。『禪苑清規』『勅修百丈清規』による。○大行普賢菩薩：『赴粥飯法』は「大乘普賢菩薩」、『瑩山清規』『諸規』『小叢林略清規』は「大行普賢菩薩」とする。○「●」：「ここで鳴らし物を打つという印。

〔訳〕次に、匙を出し、鉢の中に置くように。次に、蓋は使わないように。食・汁・菜ともにこれ以上必要ないと思うときは、右手を挙げる。ただし、飯汁は自ら両手で捧げて受けるように。菜などは〔器を〕そのまま〔受けるように〕。次に、大衆へ飯を一通り配ったら、維那は遍食の槌を打ち、合掌して『般若心経』を読み始める。大衆は維那とともに経を唱える。経を読み畢えたら維那は槌を打ち、合掌して回向を読む。

上来諷経功德、奉為、耕夫餉婦疲馬、嬾牛螻蟻蚊虻、蝦蟆蚯蚓春炊、人力供給淨人、存者福寿康寧、亡者往生淨土。十方三世一切諸仏、諸尊菩薩摩訶薩、摩訶般若波羅密。

次に維那、

稽首薄伽梵、円満修多羅、大乘菩薩僧、功德難思議。

〔という〕偈を唱えて、すぐに「仰憑大衆念」と唱え、十仏名を唱える。

シソフサカモコサ
清淨法身毘盧遮那仏

エンモンボウシルシヤノフ
 円満報身盧遮那仏
 センバイクワシンシキヤムニフ
 千百億化身釈迦牟尼仏
 タウライアサンミリンソフ
 当来下生弥勒尊仏
 ジハウサンシイシシフ
 十方三世一切諸仏
 ダイシンブジスリフサ
 大聖文殊師利菩薩
 ダイアンフエンフサ
 大行普賢菩薩
 ダイヒクワシイシフサ
 大悲觀世音菩薩
 シンブサモコサ
 諸尊菩薩摩訶薩
 モコホシヤホロミ
 摩訶般若波羅密

⑤一仏三匝シテ槌ヲ打、大衆合掌シテ口ノ内ニ「^(十仏名)」唱畢テ。サテ給仕、汁ヲヒキ一徧ヒイテ、維那「^(和フ)」下シテ、合掌シテ施食偈ヲ唱。〈大衆モ合掌ノ口ノ内ニテソロクト唱フ〉。

三徳六味、施仏及僧、法界有情、普同供養。

「語義」○三匝…右繞三匝のこと。礼拝対象に対して右回りに三回まわること。○施食偈…『禪苑清規』卷一「赴粥飯」によれば、「三徳六味」は齋時の施食偈にあたる「補17」。○三徳六味…普同供養…「補18」。○口ノ内ニ「
 」唱畢テ…「口ノ内二十仏名唱畢テ」か。○維那「
 」下シテ…「維那槌ヲ下シテ」か。

「訳」〔聖僧に対して〕一仏三匝し、「終わって」槌を打ち、大衆は合掌して〔十仏名を〕口の内て唱え畢る。次に給仕が汁を一通り配ったら、維那は槌を一下して、合掌して施食偈を唱える。大衆も合掌して口の内にてそろそろと唱える。

三徳六味、施仏及僧、法界有情、普同供養。

⑥如此唱テ、維那槌一下ス。大衆左右ヲ看テ、一度二相掛テ、五觀想ヲナス。

一計功多少量彼来処 二付已德行全缺多減イ度供

三防心離過貪等為宗 四正似良藥為療形枯イ事

五為成道業イ世報非意應受此食イ取濟形苦〈名義集引、大論詳取以生厭想往可見繁多故略〉

〔語義〕○如此唱テ、維那槌一下ス〜五觀想ヲナス：「補19」。○五觀想：五僧。僧侶が食事の際して起こすべき

五つの想念を五觀といい、これを偈文の形したものを五觀偈という「補20」。○一計功多少量彼来処〜五為成道

業イ世報非意應受此食：「補21」。○二付已德行全欠イ世報非意應供：道宣『四分律刪繁補闕行事鈔』卷二「二付已德行全缺多減」（大

正藏四〇・八四a）とある。『名義集』によるか。○名義集引大論十九詳取以生厭想往可見繁多故略：「補22」。○名

義集：『翻訳名義集』（二一四三年成立）のこと。南宋の法雲により、仏典の重要な梵語二千余語を六四編に分

類して字義と出典を記したもの。○大論：『大智度論』の略。

〔訳〕このように唱えたあと、維那は槌を一下する。大衆は左右を看て、「そろって合わせて」一度に相掛して五觀想を行なう。

一計功多少量彼来処。

二付已德行全缺多減。「多減」は異本では「度供」。

三防心離過貪等為宗。「過貪等為宗」は異本では「顯過不過三毒」。

四正似良藥為療形枯。「似」は異本では「事」。「為療形枯」は異本では「取濟形苦」。

五為成道業イ世報非意應受此食。〈名義集』卷十九に、「大智度論」に、詳取以生厭想往可見繁多。故に略す「應受此食」

は異本では「世報非意」。

⑦名義集十九（二十）曰、事鈔、食不過三匙、初匙断一切悪、中匙修一切善、後匙度一切衆生。増一云、多食致苦患、少食氣力衰、処中而食若、如秤無高下。

〔訓〕『名義集』十九（二十）に曰く、「事鈔」に、「食するに三匙を過ぎず、初匙は一切悪を断つ、中匙は一切善を修し、後匙は一切衆生を度す」と。『増一』に云く、「多食苦患を致し、少食氣力衰う。中なる処にして食する者は、秤るに高下無しが如し」と。

〔語義〕○名義集十九（如秤無高下…）〔補23〕。

〔訳〕『翻訳』名義集』七卷（寛永五年刊行本）の十九丁から二十丁に言う、「〔四分律刪繁補闕行〕事鈔』に言う「食するには三匙で行なう、初匙は一切悪を断ち、中匙は一切善を修し、後匙は一切衆生を度す」と。『増一阿含經』に言う、「多食は苦患を生じ、少食は氣力が衰える。調度よく食べる者は、「多少という」上下がないようなものだ」と。

⑧次に生飯ヲ取テ、刷ニラク。生飯ヲ取ハ七粒ニスグヘカラス。少レハ慳食トス。合掌ノ出生ノ偈ヲ念ス。

汝等鬼神衆、我今施汝供、此食遍十方、一切鬼神共。

サテ三口クフテ汁ヲスフ。食スル時ノイマシメハ、日用清規ニ詳ナリ。サテ食シ畢ントスル時、上座ヲヨク見合テ、鉢ニ残タル食ヲ頭鎖ヘ移シテ、サテ筋ニテ食スル也。捻ノ飯ハ匙ニテ食シ、菜汁等ハ筋ニテ食スレト、頭鎖テハ筋ニテ飯ヲ食スル也。サテ食畢テ大衆筋ヲ「^飯」見テ、給仕湯ヲヒク。問訊ノ鉢ニウケ汁鎖ヘ「^移」吞也。サテ菜桶ヲヒク。残ナケレハ右手ヲ挙クア「^イ」ニテ移ス。サテ生飯、攪ニテ生飯ヲトル、大衆問訊「^問」ヲ押テトラスル也。

〔語義〕○生飯：鬼界の衆生に飯を施すこと。○慳食：飲食をおしむこと。○出生偈：生飯偈ともいう。生飯を置くときに唱える偈文。○汝等鬼神衆一切鬼神共：〔補24〕。○サテ食シ畢ントスル時、上座ヲヨク見合テ：食事の食べる終わるのを合わせることを意味しているか。○上座：首座のこと。第一座。○筋ヲ「見テ：」筋ヲ置クヲ見テ」か。食事が終わって箸を置くのを見ての意味だと思われる。○汁鎖へ「吞也：」汁鎖へ移シ吞也」か。湯を汁鎖に移してから飲むという意味だと思われる。○攪：不詳。生飯（サバ）を取る道具であるうか〔補25〕。○大衆問訊「」ヲ押テトラスル也：「大衆問訊刷ヲ押テトラスル也」か。ただし二文字分あるようにも見える。刷の上に置いた生飯を取ってもらうための行為かと思われる。○右手ヲ挙クア「」ニテ移ス：よく分からないが、「右手ヲ挙クアイダニテ移ス」だろうか。

〔訳〕次に生飯を取り、刷に置く。生飯を取ることは七粒より多くしてはいけなし、少ないことは食を惜しんでいゝるようなものだ。合掌して出生の偈を唱える。

汝等鬼神衆、我今施汝供、此食遍十方、一切鬼神共。

次に、三口食べてから汁を飲む。食事をする際のいましめは、『日規』に詳しい。次に、食べ終わりそうな時、上座〔が食事の終わりそうな状況〕を良く見合わせて、鉢に残っている食を頭鎖へ移して、次に筋で食べる。総じて飯は匙で食べ、菜汁等は筋で食べるが、頭鎖では筋で飯を食べる。次に、食べ終わり、大衆が筋を置くの見て、給仕は湯を注ぐ。問訊して鉢に受け、汁鎖へ移して飲む。次に菜桶を持ってまわる。残りがなければ右手を挙げ、その間に〔手が上がっていない残りがある人の菜を菜桶に〕移す。さて生飯は、攪で生飯をとる。大衆問訊をして、〔刷を〕押しとらせる。

⑨サテ水ヲヒク。問訊ノ鉢ニウク分「」^眞鎖ニ余ヌ様ニ心得ヘシ。刷ニテ鉢ヲ洗ヒ、刷ト水トヲ頭鎖ニウツシ、鉢

ヲフキ、鉢拭ヲ鉢ノ内ニヲキ、サテ刷ニテ匙ヲ洗ヒフイテ袋ニ入、サテ刷ニテ頭鎖ヲ洗ヒ、刷ト水トヲ菜鎖ニ移シ、頭鎖ヲフイテ鉢ニ架シ、サテ刷ニテ箸ヲ洗ヒフイテ袋ニ入、刷ニテ菜鎖ヲ洗、刷ト水トヲ水鎖ニ移シ、菜鎖ヲフイテ架シ、刷ヲフイテ袋ニ入。サテ折水ヲヒク、問訊ノ偈ヲ念メコボス也。

我此洗鉢水、如天甘露味、施汝諸鬼神、悉令得飽滿、唵摩休羅細娑婆訶。

〔語義〕○折水：応量器や鎖・匙・箸を洗つた水を捨てること。桶をもつた係のものが周り、器を洗つた水を回す。○我此洗鉢水、唵摩休羅細娑婆訶…〔補26〕。

〔訳〕次に水を配る。問訊して鉢に受ける。「水を頂く」分〔量〕は〔頭〕鎖に余すことを忘れないようにしなさい。刷にて鉢を洗い、刷と水を頭鎖にうつし、鉢をふき、鉢拭を鉢の内に置き、刷にて匙を洗いふいて、袋に入れる。次に、刷にて頭鎖を洗い、刷と水とを菜鎖に移し、頭鎖をふいて、鉢に重ねて、刷で箸を洗いふいて袋に入れ、刷で菜鎖を洗い、刷と水とを水鎖に移し、菜鎖をふいて重ね、刷をふいて袋に入れ、次に、折水の係が来たら、問訊して偈を念じて〔器を洗つた水を〕こぼす。

我此洗鉢水、如天甘露味、施汝諸鬼神、悉令得飽滿、唵摩休羅細娑婆訶。

⑩サテ水鎖ヲフイテ架ス、淨巾ニテ汁水ナトノコホレタルヲフキ、サテ単ヲ畳テ鉢ニ入、膝巾ヲ収、鉢ノ蓋ヲ収、匙筋ノ袋ヲ収。サテ帕子ヲムスビ其上ニ鉢拭ヲ二ツニ折テカケ、サテ問訊ノ食畢ノ偈ヲ念ス。

飯食訖已色力充、威震十方三世雄、回因転果不在念、一切衆生獲神通。

下堂ノ槌一下シテ、起左右へ問訊メ、サテ鉢ヲ〔釋〕出。若觀金アレハ五觀想了テヒク也。合掌〔合〕ノ儘ヲク也。維那、槌一下シテ施財偈ヲ唱〔フ〕。

財法二施、功德無量、檀波羅蜜、具足円滿。

若菓子アレハ、食畢ノ偈ヲトナヘヌ前ニヒク也。

〔語義〕○食畢偈：食事が終わった際に唱える偈文。○下堂：修行僧が食事を終えて僧堂より退出すること。○サテ鉢ヲ「」出：「サテ鉢ヲ持テ出」か。○飯食訖己色力充一切衆生獲神通：〔補27〕。○襯金：施主から三宝に施す金品をいう。○合掌「」ノ儘ラク也：〔合掌シソノ儘ラク也〕か〔補28〕。○施財偈：供養がなされたことに対して唱える偈文。○財法二施ノ具足円満：〔補29〕。

〔訳〕次に、水鎖を拭いて重ねる。浄巾でこぼれた汗水などをふく。次に、〔鉢〕単を畳んで鉢に入れ、膝巾を収さめ、鉢の蓋を収さめ、匙筋の袋を収さめて、帕子を結び、其の上に鉢拭を二に折って重ね、問訊して食畢偈を唱える。

飯食訖己色力充、威震十方三世雄、回因転果不在念、一切衆生獲神通。

下堂の槌一下を聞いて立ち、左右へ問訊して、次に鉢を持って出堂する。若し襯金があるなら五観想が終わって配る。合掌してそのまま置く。維那、槌を一下して、施財偈を唱える。

財法二施、功德無量、檀波羅蜜、具足円満。

もし菓子があるなら、食畢の偈を唱えるまゝに配る。

①此者五嶽流習之式也。今因百丈之古規詳考、始末問正舛訛。凡文以倭字、偈用丹毫。要使童行者易知之。願夫為日用規約之一助乎云。寛文戊申二月日、朴堂鴻西堂誌。

〔訓〕此は五嶽流習の式なり。今、百丈の古規を詳考するに因り、始末の間に舛訛せんかを正す。凡そ文は倭字を以つてするも、偈は丹毫を用う。童行者をして易やすく之を知らしめんことを要す。願わくは夫れ日用規約の一助と為らんことをと云う。

寛文〔八年〕戊申（一六六八）二月日、朴堂鴻西堂誌。

〔語義〕○五嶽：五山。○舛訛：舛誤。あやまり。○丹毫：漢語。

〔訳〕これは五嶽（五山）流として教わった食事作法である。今、百丈の古規を詳考した因縁により、その間に誤りを正したものだ。凡そ文章は倭字であるが、偈は漢語を用いた。童行者に容易にこのことを知って欲しいのだ。願わくは日用規約の一助と為らんことを。寛文（八年）戊申（一六六八）二月日、朴堂鴻西堂、記す。

〔補註〕

（1）長板三下：長板（長版）は、雲版という鳴らし物
を長く打つこと。『禪林象器箋』卷二十七「長板」
に「忠曰、下鉢板、言長板。長擊三合、故名長板。
日本俗、訛為板通名。而稱鑄長板掛長板等非也。
其通名雲板也」とある。三下は文字通りであれば
三回打つことを指す。『敕修百丈清規』卷八「版」
「大版、齋粥二時長擊三通。木魚後、三下疊疊擊之、
謂之長版」（大正藏四八・一一五五c）とあって、
三通（三合）―木魚―三下という流れを記し、三
下を長版と称している。ちなみに、『禪林象器箋』
卷二十七「下鉢板」には、「忠曰、粥時長板、名
下鉢板。齋時三下板、為下鉢板」と、齋時には三
回打つ作法が記される。『禪林象器箋』の「版」
の項目を読むと、おそらく江戸前期の時点で、さ
まざまな作法が伝わっていたと考えられる。『展
鉢式』には「粥」に関する記載がなく、後述する

ように、施財偈も中食のものが掲載されているた
め、あるいは中食の作法が記されているという可
能性もある。

（2）執持応器／受人天供：応器を執持す、当に願わく
は衆生とともに、此器を成就し、人天の供を受け
んことを。刊本の『諸規』には「執持応器、当願
衆生、成就法器、受人天供」とルビが記されてい
る。現存清規における初出は、『禪備』卷十「合
掌念佛云（執持応器、当願衆生、成就法器、受人
天供）」（続藏一三七・六九b）である。『禪門諸祖
師偈頌』卷下「下鉢偈」「執持応器、当願衆生、
成就此器、受人天供」（続藏一一六・四八五d）に
載る。『禪備』『諸規』は「成就法器」、『禪門諸祖
師偈頌』は「成就此器」であり、『禪門諸祖師偈頌』
が『展鉢式』の「下鉢偈」に一致する。『禪規』『日
規』『勅規』にはない。

- (3) 百丈くトアリ：『日規』「或婦衆寮、入堂婦鉢位。低躬問訊上中下座。若已先坐、上中下座来須合掌。古云、不敬上中下座。婆羅門聚會無殊」(続藏一一・四七二c)、『敕規』卷六「或令行者取鉢堂外坐。或婦衆寮打給入堂婦鉢位。須低頭問訊上中下座。若已先坐上中下座来須合掌。古云(不敬上中下座。婆羅門聚會無殊)」(大正藏四八・一一四四c)とある。
- (4) 是ヨリ堂「」：「是ヨリ堂前鐘鳴」か。『日規』「軛身令正。蹲身放鉢。免將腰背撞人。堂前鐘鳴」(続藏一一・四七二c)、『勅規』卷六「亦要順上肩合掌方取鉢。一手解鉤左手提鉢。軛身令正蹲身放鉢。免將腰背撞人。堂前鐘鳴下床為迎住持入堂大衆普同問訊」(大正藏四八・一一四四c)。
- (5) 聖僧：僧堂の中央に安置する仏像。安置する仏像には決まりはないが、現在では文殊菩薩像を安置する例が多い。『禪林象器箋』卷五「聖僧」「忠曰、僧堂中央所設像、総称聖僧。然其像不定」とある。
- (6) 隣位問訊：僧堂で自分の左右の単の人を隣位と呼ぶ。僧堂に入って自分の単についた時、自分の単に向かつて合掌低頭するが、それは自分の隣位の二人に合掌低頭していることになる。これを隣位問訊という。
- (7) 木魚：魚鼓。魚の形をした鳴らし物。現在のいわゆる「木魚」は、臨済宗黄檗派によってもたらされた。そのため、現在では、それ以前の「木魚(魚鼓)」と現在の木魚とは区別されている。曹洞宗では梆(ほう)と呼び、黄蘗宗では開梆(かいばん)と呼ぶ。臨済宗では梆・開梆は基本的に用いられない。
- (8) 長擊二通：木魚を二通(二会)打つこと。『敕規』卷八「木魚」「齋粥二時長擊二通。普請僧衆長擊一通。普請請行者二通。相伝云、魚昼夜常醒。刻木象形擊之。所以警昏惰也」(大正藏四八・一一五六)とある。
- (9) 如来応量器(等三輪空寂)：如来の応量器、我今ま敷展を得、願わくは共に諸衆生、等しく三輪空寂ならんことを。現存清規における初出は『日規』である。『禪規』にはなく、『勅規』にはある。
- (10) 複帕ヲ疊テ、三角ニ軛シ、単ノ外へ出ヌ様ニシ：現在、曹洞宗の僧堂では、複帕を三角形になるように単の外に出す作法が残っている。原文では「複帕ヲ疊テ三角ニ軛シ単ノ外へ出ヌ様ニシ」とあるが、わざわざ三角形に折りたたんだ上に、単の外にでないようするというのが良くわからない。そのため、「出ス」の誤記ではないかと判断し、そ

れを踏まえた訳を記した。

- (11) 鉢単(はったん)：禪寺での食事に際する器の下の敷物。九つに折りたたんであり、食事に際して述べて広げ、その上に応量器を広げる。広げた場合、現在のランチョンマットのようになる。

- (12) 鉢蓋(はつがい)：鉢に埃などが入らないようにする蓋。『四分律』卷四三「鉢若不正応作鉢支、若塵空応作蓋(鉢若し正しからずは応に鉢支を作るべし。若し塵空あらば応に蓋を作るべし)」(大正蔵二二・八七五c)とある。『釈氏要覽』「鉢蓋。律云、有塵空、鉢聽作鉢蓋」(大正蔵五四・二七九b)とある。

- (13) 若受食時(若くは受食の時)法喜充滿(法喜が満ちる)：若し食を受くる時は、当に願わくは衆生とともに、禅悦を食と為し、法喜充滿せんことを。現存清規における初出は『日規』である。『禪規』にはなく、『勅規』にはある。

- (14) 右ノ手ヲ挙「」：「右ノ手ヲ挙グ」か。現在伝えられている動作ではあるが、応量器を両手にもって給仕を受けている際、粥・飯・汁の量が適度になれば、右手を離してわずかに5cm〜10cmほど挙げる。

- (15) 上來諷經功德(以上経を誦した功徳)亡者往生淨土(亡者が往生する浄土)：『諸規』「○鉢斎維那下椎(偈権或作鉢展鉢法式諸偈呪委悉于第五

- 卷諸)偈下今挙一二偈余皆見于諸偈処。稽首薄伽梵、円満修多羅、大乘菩薩衆、功徳難思議。○次拳心經了回向(中峰各尚粥飯回向也。但可準山旧規誦也)。上來諷經功徳、奉為、耕夫餉婦疲馬、懶牛虻蟻蚊虻、蝦蟆蚯蚓春炊、人力供給淨人、存者福寿增長安寧、亡者離苦往生淨土。十方三世一切諸仏、云云(大正蔵八一・六三五c)とある。『諸規』では、回向より前に「稽首薄伽梵」を唱えてゐる。また、刊本の『諸規』には「耕夫餉婦疲馬(コウブコウフヒマ)懶牛虻蟻蚊虻(マンウマシムシ)蝦蟆蚯蚓(カマシムシ)春炊(ハルヒ)人力供給淨人(ニキカキキヨクジヨウジン)存者福寿(ソンジャフクシユ)增長(ゾウチャウ)安寧(アネイ)亡者離苦往生淨土(マウジャリクニシヤウシヨウジン)とルビがふられている。

- (16) 稽首薄伽梵(稽首す薄伽梵)功徳難思議(功徳難く思議)：稽首す薄伽梵、円満なる修多羅、大乘の菩薩僧、功徳は思議し難し。現存清規における初出は『禪規』である。『日規』と『勅規』にはない。

- (17) 施食偈(施食の偈)：『禪規』卷一「赴粥飯」に「首座施食(粥云、粥有十利、饒益行人、果報生天、究竟常樂。又云、粥是大良藥、能除消飢渴、施受獲清涼、共成無上道。齋云、三徳六味、施仏及僧、法界人天、普同供養)」(統蔵一一・四四一b)とあり、「三徳六味」は齋時の施食偈にあたる。一方、『日規』や『勅規』には、この施食偈を唱える作法ない。『諸

規』には、「施粥偈」として「粥有十利」、
「施齋偈」として「三徳六味」が載る。

(18) 三徳六味、普同供養：三徳と六味を、仏及び僧と、法界の有情に施し、普ねく同じく供養せん。現存清規における初出は『禪規』である。『日規』と『勅規』にはない。

(19) 如此唱テ、維那槌一下ス、五観想ヲナス：「如此唱テ」が、前段の施食偈を指すのか、維那の五観偈を指すのかが良く分からないが、次の二つの作法を想定することができる。①施食偈を維那と大衆が「如此唱テ」、終わつて槌を鳴らして五観想をする。②維那が五観を「如此唱テ」、それを聞いたのちに大衆が五観想をする。

(20) 五観想：僧侶が食事の際して起こすべき五つの想念を五観といい、これを偈文の形したものを五観偈という。臨濟宗と曹洞宗の五観偈の相違については、拙稿「曹洞宗と臨濟宗における五観偈の相違について」(『印度学仏教学研究』七〇—二、二〇二二年)を参照。

(21) 一計功多少量彼来処、五為成道業、応受此食：『禪規』「一計功多少量彼来処。二付己德行全欠応供。三防心離過貪等為宗。四正事良薬為療形枯。五為成道故、応受此食也。『日規』「一計工多少量彼来処。

二付己德行全欠応供。三防心離過貪等為宗。四正事良薬為療形枯。五為成道業、応受此食。『勅規』「一計功多少量彼来処。二付己德行全欠応供。三防心離過貪等為宗。四正事良薬為療形枯。五為成道業、故、応受此食」とある。詳しくは前掲拙稿「曹洞宗と臨濟宗における五観偈の相違について」を参照。

(22) 名義集引大論詳取以生厭想、往可見繁多故略：『翻訳名義集』卷七「凡受食時、応作五観。一計功多少量彼来処(大論云、復次思惟。此食墾植耘除。収獲蹂治。春磨淘汰。炊煮乃成。用功甚重。計一鉢之飯。作夫流汗集合。量之食少汗多。此食作之功重。辛苦如是。入口食之。即成不浄。更無所直宿昔之間、變為屎尿。本是美味。人之所嗜。變成不浄)徳(烏故不欲見。行者自思惟。如此弊食。我若貪著。当墮地獄、噉燒鉄丸。從地獄出、当作畜生、牛羊駱駝。償其宿債。或作猪狗、常噉糞除、如是觀食、則生厭想)。二付己德行全欠多減。三防心、顯過不過三毒。四正事良薬取濟形苦。五為成道業、世報非意」(大正藏五四・一一七三a)とある。

(23) 名義集十九、如秤無高下：『翻訳名義集』卷七「事鈔、食不過三匙、初匙斷一切惡、中匙修一切善、後匙度一切衆生。增一云、多食致苦患、少食氣力衰、処中而食者、如秤無高下」(大正藏

五四・一七三a)とある。『四分律刪繁補闕行事鈔』卷三「伝云、凡食不得過三匙、為斷一切惡故進初匙、為修一切善故進中匙、為度一切衆生故進後匙」(大正藏四〇・二二八c)とある。

(24) 汝等鬼神衆一切鬼神共：汝等鬼神衆、我今ま汝に供を施こす、此の食を十方に遍ねくし、一切鬼神と共にせんことを。現存清規における初出は『禪規』である。『日規』と『勅規』にもある。

(25) 攪：不詳。攪拌して取らせると理解すると、次の大衆が問訊して押して取らせるとする記述に意味が続かない。生飯(サバ)を取る道具であろうか。現在、曹洞宗では、刷の上に置いた生飯(サバ)を集める道具を使い、係の僧侶が回収する。この時、少しばかり刷を押して係の僧侶が回収しやすいようにして、その後、刷を手前に引くことで、生飯が係の僧侶の道具によつて回収される。この道具を曹洞宗では「生飯搔(さばがき)」(『新版禅学大辞典』大修館書店、第十版、二〇二〇年、三八五頁)と呼ぶこともある。「搔(かく)」なので、「攪(カク)」と読むのかも知れない。

(26) 我此洗鉢水、唵摩休羅細娑婆訶：我が此の洗鉢水、天の甘露味の如し、汝諸の鬼神に施与して、悉とく飽満なることを得せしめん。唵摩休羅細娑婆訶。現存清規における初出は『日規』である。『禪規』にはなく、『勅規』にはある。

(27) 飯食訖已色力充、威震十方三世雄、回因転果不在念、一切衆生獲神通：飯食し訖已つて色力充つ、威は十方三世の雄に震わし、因を回らし果を転じて念に在らず、一切衆生神通を獲る。現存清規における初出は『禪規』である。『日規』と『勅規』にもある。

(28) 合掌「」ノ儘ヲク也：「合掌シソノ儘ヲク也」か。これは、駒澤大学図書館蔵『清規抄』に「襯ヲ行ニハ、台ノ上ニ置、合掌ノ受、其俗置、食畢テ取也」とあることと、「ノ儘ヲク」に続く言葉として、とりあえずこのように理解した。

(29) 財法二施、具足円満：財法二施、功德は無量にして、檀波羅蜜、具足円満す。現存清規における初出は『禪規』である。『日規』と『勅規』にはない。